

後めたくとも

松本 恒子

はからずも今年は、旧友たちとの集いを幾度か持つ機会をえた。一月十七日、大ゆれにゆれた阪神大震災の余波は大きく、親類知人友人の安否を気づかっていた。そんなとき女学校時代の友から思いがけない電話連絡が入った。西宮に住む友人が大きなはりの下で圧死という痛ましい知らせだった。昨年同窓会でお会いしたばかりなのに。先生を囲んで亡くなった友人も含めての共通の話題は、女学校三年生のときの学徒動員のことであった。

昭和二十年六月、下級生の二年生が、工場と化した教室で上級生たちと機械にまみれているのを横目で見ながら、学校農園で陸穂や野菜作りをしていた。私たち三年生にもやつと動員令が出た。その行先は綾部の軍需工場である。遠隔地への出発は、不安で一杯だっ

た。不安は着いたあともますます大きくなつていった。朝七時は「海ゆかば」の歌のあと、縫製工場で落下傘の部分縫いやボタン付け機械工場では砲弾運びや手りゅう弾の内部を薬品で洗ったりと慣れない仕事が続から次へと追いかけてきた。

手りゅう弾の作業中、この手りゅう弾を各自三つずつ持たされ、二つは身を守るため投げ、一つは自決用だどこからともなく聞こえてきた。文字どおり「撃ちてしやまん」の精神をたたき込まれていた私たちも空腹にはこたえた。口に入るものなら文句もいわなかったが、さなぎの圧縮したものが御飯の中に入っていたときだけはさすがに飲み込むのがつらかった。動物性たん白、カルシウムの補充だったのだろうが：。夜も空襲警報がなる度に防空壕（ごう）に入り睡眠不足になった。これでは倒れない方が不思議で、次々と病人が出て付属の病院はいつも満床だった。後で聞いた話だけれど、引率の先生方が生徒た

ちの休養がとれるようにとの配慮があつてのことだそうである。

八月十五日、先生方が目を真っ赤になさつて私たちに終戦を告げられた。私の力が及ばなかつたという思いと、これで家へ帰ることがができる喜びとが交錯していた。

たかが三か月たらずの月日が季節の移り変わりも忘れ、一筋にお国のための思いをけなげさに、ただいとしい思いにかられることがある。いつも戦争体験を考える時、私は後ろめたさを感じていたのはこのことなのだろう。

父母や先生方、責任ある人々の思いやつらさ、犠牲になられた多くの人たちのことを考えると私の甘さは恥ずかしい。ずっとこんな気持ちを持ち続けてきた。けれど戦争を知らない年代の人が多くなった現在、私のような体験でも、語り継ぐべきときなのかもしれない。当時の私たちを守って下さった父母や先生方、多くの人たちへの感謝の気持ちはこれ

からも忘れることはありません。